

# フリードリヒ・キットラーのメディア論再考・序説

田 辺 龍

## 1. はじめに

フリードリヒ・キットラー (1943-2011) の主著のひとつ『グラモフォン フィルム タイプライター』(Kittler 1986=1999) の邦訳が出版されたのは1999年である。その前年には『ドラキュラの遺言』(Kittler 1993=1998) も日本語訳が出版され、同時期には、キットラーの盟友でもあったノルベルト・ボルツやマンフレート・シュナイダーらの著作が邦訳出版されたこともあって、1990年代後半から2000年代にかけて、キットラーらの議論は「ドイツ・メディア論」、「ドイツ系メディア論」と総称されて注目を浴びることとなった<sup>1)</sup>。

ドイツ系メディア論への注目は、新たなメディアとしてのインターネットが急速に普及していく時期と重なっている。テレビの普及期に同じく世界的な注目を集めたマクルーハンの系譜に連なるデジタル時代のメディア論として、インターネットに接近するための手がかりを求めての受容であった側面が大きいだろう<sup>2)</sup>。なお、ここでいう「メディア論」とは、マクルーハンに代表されるトロント学派のメディア論であり、一般的には技術決定論として理解されているように、「ある時代の主要なメディアが同時代の人間や社会のあり方を規定する」という考え方である。「無意識」の発見はフォノグラフの登場に多くを負っている」という言い回しに典型的なように、キットラーもまた「技術」という要因がさまざまな考察において見落とされがちであること、それゆえに技術への着目が重要であることを多くの著作やインタビューで繰り返し強調している。

にもかかわらず、前出『ドラキュラの遺言』第Ⅲ部に収録された諸論考を除いて、キットラー自身はデジタル・メディアに関するまとまった著作を残すことなく2006年に急逝した。一方で、テレビの時代に比して、インターネット技術に依拠した新たなサービスの登場とその消長は「ドッグイヤー」と称されるほどに早いサイクルで推移して、関連する言説もまた一過性の流行現象のようにもはやされては忘れられていく。キットラーの著作もまた2010年代以降は新たな邦訳が出版されることはなく、ドイツ系メディア論を対象を広げてもまた、日本においては論文すらほとんど書かれなくなっているのが現状である。

本論の目的は、上記の状況を踏まえてもなお、デジタル・メディア時代においてキットラーを再読することに意義はあるのかについて考察することにある。本論では、その意義の中心を、彼自身が著作やインタビューで繰り返し強調している「コミュニケーションの物質性」、通常は見落とされがちな技術の重要性への着目として捉えている。その代表的な事例として、タイプライターの登場からコンピュータ、スマートフォン時代にいたる「書くこと」の変遷について、キットラーの議論を中心に整理・再検討して、「2000年代の書き込みシステム」論への端緒として提示することになる。次節では、まずキットラーの日本における受容として、言説分析／メディア論としての理解に関する先行研究を概観して、フーコーの言説分析との連続性／非連続性を指摘した上で、19世紀末に登場したメディア・技術への着目こそがキットラーをメディア論として読む際に重要であることを明らかにする。第3節では、人類史における

最初の記録メディアである文字の登場からデジタル・メディア時代まで一貫するメディア史を構想していたと思われるキットラーの未完のデジタル・メディア論に迫る糸口として、改めてタイプライターに関する議論を主に参照しながら一紙を用いた手書きの時代からインターネット時代に至るまで、われわれは一貫して文字を書いている、「書くこと」「書く行為」の変容を記述する。最終節では、デジタル・メディア時代における「書くこと」「書く行為」に関する若干の事例をあげつつ、キットラーのメディア論の可能性を指摘して、今後の課題および展望を明らかにしておこう。

## 2. 言説分析／メディア論のキットラー

### 2-1. 言説分析のキットラー

キットラーの方法論はマクルーハンのメディア論、ラカンの精神分析、フーコーの言説分析に依拠していることは、すでに多くの論者が指摘している。本節ではまず、フーコーの影響について、キットラーの著書を概観しながら簡単にまとめておこう。フーコーからキットラーへと受け継がれている視点は、「われわれの知のありようは、言説の記録・保存システムの論理により決定される」ということである。キットラーはメディア一般を言説の「書き込みシステム (Aufschreibesystem)」として捉えて、1985年の著書『書き込みシステム 1800/1900』(Kittler 1985)では、メディア史における画期をなす「1800年の書き込みシステム<sup>3)</sup>」と「1900年の書き込みシステム」によってしか体験できない世界、あるいは当該システムによって初めて現実化した世界の記述を行っている。

「1800年の書き込みシステム」は、1800年(+/-15年ほどを含む)における活字文化環境の成立によって特徴付けられる(伊藤 1999: 3)。この時期はまた、近代ドイツ文学あるいは近代人文学の始まり、フーコーのいう「古典主義時代」に重なり、文字と書物による情報処理メディアの

独占をもたらした(前田 2016: 118)。「1800年のシステム」は、前半は特に手書きの言語により分節された世界をもたらし、これは超越的な権威者としての「父」に比すべき言語を操る男性作者の世界であり、安定的な意味への訴求が可能であったとキットラーはいう<sup>4)</sup>。

「1900年の書き込みシステム」は19世紀末におけるグラモフォン、フィルム、タイプライターという新たな技術メディアの登場として、「書き込みシステム」の歴史におけるもうひとつの重要な非連続性をもたらした。音声データをそのまま記録・保存するグラモフォンは、言語によっては捕捉不可能な領域を開拓する。フィルムは映像データの操作・編集を可能にして、タイプライターは書字の自動化をもたらし、文字と書物の独占権に終止符を打つことになった(前田 2016: 118)。『書き込みシステム 1800/1900』の後半部分、「1900年のシステム」の詳細な考察は『グラモフォンフィルム タイプライター』として結実する。

「書き込みシステム」という概念の形成のみならず、自身の方法論におけるフーコーの大きな影響については、キットラー本人も認めている(たとえば Armitage 2006: 19-21)。一方、フーコーのいわゆる「考古学」の方法を継承しつつ、フーコーの言説分析が具体的には1850年までしか行われていないとして、つまり、文字と書物の時代にしかその分析が届いていないという限界もまた指摘している。「フーコーのディスクール分析は、音の保管庫、映画のリールの山を前にして機能不全に陥ってしまう」(Kittler 1986=1999: 16)。ここにフーコーとキットラーを分かち、あるいはキットラーをフーコーの批判的継承者とする「1900年の書き込みシステム」に関する記述の重要性が浮上する。

キットラーの議論を踏まえたフーコーへの批判として、あるいはフーコーの言説分析を19世紀末以降のメディア環境へと展開する視点として、北田暁大は「≪1800(19世紀末のニュー・メ

ディア登場以前) >を支配する知の集積のありよう(アルシーヴ)が、ほかならぬ<1800>における「文字」という書き込みのシステムの効果であること(北田 2006: 63)をキットラーは明らかにしたと述べている。そして、「<1900(ニュー・メディア登場以後)>」においては、キットラーがいうように、もはや「『人間』を支える書字の独占が終焉」(Kittler 1986=1999: 155)している。この指摘は、キットラー=フォーコーの議論を「1800年の書き込みシステム」の内部にその「システムの効果=臣下として書きとめられた『人間』—『精神』や『意識』や『内面』をそなえた(だからこそ神経症を病むことのできる)『主体』」(前田 2016: 118)の生成と捉えるならば、「人間の終焉」(フォーコー)をめぐる議論をもまた「1900年のシステム」へと架橋する可能性を示唆していると言えよう。

## 2-2. メディア論のキットラー

フォーコーの「考古学」における言説観を端的に示すものとして、「一つの言表は、紙片に手で書かれていても、書物の中で公にされても、同一でありうる」。また、「口頭で発音されても、ポスターに印刷されていても、録音機で再生されても、同一でありうる」(Foucault 1969=2006: 157)という指摘をあげるならば、ここでは言説に内在する力あるいは効果のようなものを強調していることは明らかであるが、一方で、その言説をコンテンツとして実装するメディアというファクターは、後景へと退いてしまっている。先述のように、このフォーコーの言説分析の限界を指摘した書物こそ『グラモフォンフィルム タイプライター』であった。以下ではまず、19世紀末に登場した3つの記録メディアの重要性を強調する本書を主な素材としつつ、キットラーの議論とトロント学派のメディア論との連続性/非連続性を確認しておこう。

マクルーハンらの英米系メディア論が提示するメディア変遷の図隙的枠組み、すなわち「口頭メディア→文字メディア→活字メディア→電気メ

ディア」について、キットラーはそれを基本的に踏襲ながらも、独自にそれを換骨奪胎していると大黒岳彦は指摘している(大黒 2006: 93)。キットラーによるコミュニケーション技術の歴史的変遷は、「文字・文書(Schrift)」の時代と「技術メディア(technische Medien)」の時代に大別されており、前者はさらに「手書き文字」時代と「印刷」の時代に、後者は「電話とアナログ技術」の時代と「デジタル技術」時代とにそれぞれ細分されている<sup>5)</sup>。

「口頭メディア」を規範あるいはそこへと回帰すべき理想的メディアとする英米系メディア論に対して、キットラーは上記のように記録メディアである文字の登場以降に関心をおいている。キットラーにとっての「メディア」は「文字」であり「記号」であり、さらに「言語」に限らず何らかの「データ」を「書き付けて記録する(Aufschreiben)」ことが歴史を貫通する「メディア」の基本的なあり方であるとキットラーは考えている。これを概念装置にまで高めたものが「書字システム」「書き込みシステム(Aufschreibesystem)」にほかならない<sup>6)</sup>という(大黒 2006: 93-4)。

キットラーとマクルーハンら「メディア史観」グループとの関心の所在の懸隔にもかかわらず、両者には重要な連続性もまた存在する。両者ともに情報や知識の「内容」ではなく「形式」に、「意味」そのものではなく「意味」存立の基盤、さらにその可能性の条件としての物質的な配備にフォーカスする議論である。ハロルド・イニスによる「知識輸送のシステム」としての「帝国」、マクルーハンによる「人間の感覚拡張のシステム」としての銀河系に対応するキットラーの概念こそ、「データの産出、選択、伝達、加工、保存を具現している時代時代の技術的・制度的な自己完結的・再帰的ネットワーク」としての「書き込みシステム」である。さらに、キットラーのシステムにはサイバネティック理論に依拠したフィードバック・ループが組み込まれている点で、

イニス＝マクルーハンのシステムに比してより自律的＝自立的でもある（大黒 2006: 94-5）。

キットラーが最終的な定式化を行っていない「2000年の書き込みシステム」については、『グラモフォンフィルム タイプライター』の掉尾部分、論文集『ドラキュラの遺言』の第Ⅲ部においてその輪郭をうかがうことはできる。キットラーは、アナログ技術メディアであるタイプライターの延長線上にデジタル技術メディアであるコンピュータを位置付けている。だが、そこに書き込まれる「文字」はもはやアルファベットではなく、それ自体としては意味を持たない「0と1」のバイナリデータの果てしない連続である。この「0と1」の果てなき連続によって、「音声」も「映像」も「アルファベット」も等質なデータに還元されて、自由に編集・加工することが可能になる。コンピュータというデジタル・メディアにおいては、読み書きをするのは基本的にコンピュータそれ自身であり、「人間ならざるメディアが、人間にとっては意味を持たないバイナリデータを読み書きする」こと、キットラーが指摘する「人間を必要としない自ら読み書きをする技術」である「テクニカル・ライティング」の全面化こそが「2000年の書き込みシステム」の姿であると大黒岳彦はいう（Kittler 1986=1999: 9-10, 27-36 および大黒 2006: 112-3）。

大黒の素描においてその全体像が示唆されている「2000年の書き込みシステム」であるが、2000年代がまだ20年を経っていない以上当然であるが、やはりその詳細は明らかではない。前田良三は、『ドラキュラの遺言』に関する論考の中で、「人間の関与を徹底的に排除するかに見える」キットラーの「書き込みシステム」という概念について、そのメディア理解から人間の身体が序題されているという批判、あるいは彼のメディア論全般に対する技術決定論であるという批判は性急すぎるのではないかという疑義を呈している。キットラーの議論においてメディアや技術に関与できない人間とは、フォーコーが指摘するような人

文的言説の所産としての「人間」であること<sup>7)</sup>を強調する前田は、フォーコーが剔抉した言説の構築物としての近代的「人間」が歴史的に吟味される中で「経験的人間から切断してきた」こと、この切断の徹底性と倫理的とも言う一貫性においてキットラーを評価している。この徹底性を、新たな文化研究の理論構築に向けて生産的に継承するためにこそ『ドラキュラの遺言』は再読されねばならないという（前田 2016: 122-4）。

われわれはここで、キットラーがアナログ技術メディアであるタイプライターの延長線上にデジタル技術メディアであるコンピュータを位置付けていること、キットラーが自身のメディア論から除外した「人間」とは言説の構築物としてのそれであって経験的人間ではないことを踏まえて、「2000年の書き込みシステム」への考察に向けて、キットラーによるタイプライターの分析に耳を傾けてみよう。ここで関心の焦点とするのは、われわれ経験的人間とメディアとのインターフェイスにおいて、タイプライターからコンピュータへと連続している「書くこと」「書く行為」である。インターフェイスにおいてアナログ技術メディアからデジタル技術メディアを通底する行為としては、もちろん「聴くこと」「聴く行為」や「見ること」「見る行為」もあげられる。実際にわれわれは、コンピュータを用いてCDを聴くようにデジタル化された音楽を聴いており、また映画やテレビを見るようにデジタル化された動画を見てもいる。しかし、コンピュータを用いて聴くことや見ることは、コンピュータを用いて書くことほどの変質を被っていない。さらに言えば、書くこと、書く行為の変質は、紙の上に手書きの文字を書くことからタイプライターのキーを押すこと、コンピュータのキーボードを操作することから、こんにちのスマートフォンでのフリック入力まで、表面的に見て取れるだけでも大きく変化している。その端緒として、キットラーがいう「書字の自動化」の初発点としてのタイプライターの登場について以下で見たい。

### 3. 「書くこと」の自動化—タイプライターとコンピュータの連続性

#### 3-1. タイプライター=「書く機械」の登場

「1900年の書き込みシステム」において、グラモフォンやフィルムといったメディア技術の革新に比肩するものが、タイプライターである。それは肉筆の「筆跡」のような、書き手の代理を果たす感覚を持たない。つまり、タイプライターはいかなる個人の身体も保存しないことをキットラーは強調する。こうして、歴史的に同時期に発明された映画、蓄音機、タイプライターは、視覚・聴覚・書字というデータの流れを分断した。「1880年のメディア革命は、情報を精神と取り違えることのない理論・実践への道を開いた（思索ではなく回路解析など）」のである（Kittler 1986=1999: 27-32）。

タイプライターが具現化した「1800年の書き込みシステム」との非連続性は、「書字の自動化と手書きによる書字の独占の終焉」である。「タイプライター」とは「書く機械」とタイピスト（書く女性）とのダブルミーニングであることを重視するキットラーは、レミントンⅡ型タイプライターは、「映画のようにイマジネールなものを煽りたてることはできず、蓄音機のようにリアルなものをシミュレートすることもできない」が、それが「書く者の性を転倒させること、「そのことがしかし、文学というものの物質的基盤をも転倒させてしまう」ことを強調する。「タイプライターの発達する以前は詩人、秘書、植字工はみなただひとつの性、男性に限定されていた」ため、「男と女の『シンボル』ははじめからあまりにもこれみよがしに、書くこと（男性であるという）独占権にしがみついて」おり、さらに、ゲート時代のディスクールを縛る規則、「権威とは著者であることを意味し、手で書くということはそれを再読するということの意味し、作者のナルシズムとは読者の従順を意味するということ」が加わり、書くことはすなわち男性の特権性と同義で

あった。したがって、レミントンⅡ型タイプライターの登場後、苦しい訓練をして修得した手書き文字を男性事務員たちが手放したくなかったこともあって、「女性事務員があまりにもたやすく、単なる書く機械になりさがった」。こうして、多くのタイプライターについての先行研究が指摘しているように、女性タイピスト=秘書の受容は高まっていった（Kittler 1986=1999: 283-96）。

タイプライターはしかし、書くことから男性性を放逐したのみではない。「人間に代わって、人間が思考し、人間が著者であるということの代わりを果たすべく、作者のいないテキストと、見ないでも書ける文具、の二つが登場した」ことこそ注目すべきことであるという。初期のタイプライターは、アウトプットされてくるものをすぐに視認することができなかったことを述べて、キットラーは「最初の機械化された哲学者」ニーチェの経験を素描する。ニーチェは視力がないことで「書物から解放」されたという。「手で書くときは、眼はたえず書いている箇所を、しかもそこだけを注視していなければならない。眼はどの文字が成立するときにも監視し、測定し、誘導しなければならず、要するに手を一画ずつ導き、制御しなければならなかった」が、タイプライターにより、「紙面はそもそも手とも離れていて、手が作業しているところとはまったく別の場所におかれ」、「書く行為が主体の恩寵にすぎることをやめて」しまったという。ニーチェは、「哲学から文学へと、再読することから純粋に書く行為へと、見ずに書く行為、自動的に書く行為へと移行していった」。「タイプの書字では何もかも見えるのだが、文字がいま現に書き込まれているところだけはどうしてもみえない」。こうして、「作者のいないテキスト」がタイプライターによって大量に生産されるようになり、著者性からの距離はそれに連れて拡大して、やがてテキスト処理というプロセスへ至る（Kittler 1986=1999: 309-37）。

キットラーのタイプライター論を以上のように概観すると、過度な技術決定論であり人間の身体

を無視した特異なメディア理解であることばかりが批判されるキットラーのメディア論への理解は、一面的に過ぎること（前田 2016: 123）が判明する。まず、手書きの文字を書く行為は、眼がたえず書いている箇所を注視していなければならないこと、「眼はどの文字が成立するときにも監視し、測定し、誘導しなければならず、要するに手を一画ずつ導き、制御しなければならなかった」ことと不可分なように、身体的行為にはほかならないことが指摘されている。そして、紙とペンからタイプライターへと書く手段が変化することによって、書くという身体的行為が決定的に変容したことが語られる。手書きからタイプライターへとインターフェイスが劇的に変化することによって、書く行為が「主体の恩寵」から乖離して、その先に「テクニカル・ライティング」の勝利がもたらされることにキットラーの主要な関心と議論の焦点があることは言うまでもないが、「経験的人間」というファクターが全く無視されているわけではない。ただし、以下ではわれわれは、キットラーのメディア論を補完する視点として、彼が関心の主要な対象から外した経験的人間のインターフェイスにおける変容をこそ注視しながら、それを追っていかねばならない。

### 3-2. 「技術」としての「書くこと」

キットラーのメディア史において重要な分岐点をなしている書字の自動化の初発点、タイプライターの登場について、さらに、その他のメディア研究ではどのような理解がなされているのかを以下で参照して、キットラーのメディア論をその特異性においてではなく、先行研究との連続性を意識しながらまとめておこう。

まず、トロント学派のメディア論とキットラーとの共通点として、書くという行為や書くための道具がわれわれの認識までも決定していくという考え方があげられる。ハロルド・イニスによれば、メソポタミアにはパピルスが存在しなかったために記号を記録する面は粘土板に限られ、その粘土

板に刻み目を入れるための尖筆によって抽象的な楔形文字を発達させた。毛筆とパピルスによる記録を発達させたエジプトのように、メソポタミアの絵文字に比してより写実的な絵文字を描くことは、尖筆と粘土板ではそもそも不可能であった。このように、書く道具と書かれる面による制約を明らかにしている（Innis 1951=1987: 46-50）。キットラーもまた、「文字・文書」時代の記述において、「コミュニケーションの空間と時間を決定するのは、筆記道具と筆記面という物理的変数なのである」としている（Kittler 1996=1996: 146）。長期保存には向かないが持ち運びが容易である紙は空間に偏向した（space-biased）メディアであり、時間的な保存性は高いが移動には向かない石碑や粘土板は時間に偏向した（time-biased）メディアであることを指摘したイニスと共通する視点であり、筆記道具と筆記面という変数は余りに物質的であるせいなのかもしれないが、注意を引くことが少なく、にもかかわらず、「権力獲得の鍵を握ったのは、筆記道具、筆記面という極めて単純なものだった」こと、「権力はその都度文字・文書の使用によってもたらされた」という（Kittler 1996=1996: 147）。つぎに、文字というメディアや「書くこと」について見ていこう。

ウォルター・J・オングは、その古典的な文字文化の研究の中で、キットラーと同様に、「書くこと」そのものを「技術」として繰り返し強調している。そして、やはりキットラーと同様に、手書きの文字を書く際に、それを書きながら目で追うという行為の重要性に着目している。さらに、周知のように、手書きの文字を書くという行為に伴って、手が文字を書いているそのときに眼でその文字を追う＝再読するという再帰的なプロセスに「自己意識」の形成を見出している。文字は、こうして話し言葉をいわば「モノ」として分離して、それを書きながら読むという行為によって、反省意識を生ぜしめたというオングはいう。これにより、知るもの（＝主体）と知られるもの（＝客体）が分離され、内省活動は分節化される。そ

して、自己は注意深く項目化された内省へと向かい、そこで内面的に構造化されている継起的関係に対する入念な分析へと向かう傾向をつくりだしたのである (Ong 1982=1991: 199-236)。したがって、「書くこと」そのものはオングにとっては印刷やコンピュータ以上の大きな変化をもたらしたものであり、「書くこと」により始まったこと一動いている音声を静止した空間に還元し、生きた現在からことばを引き離すこと一を印刷やコンピュータは継続しているにすぎないという (Ong 1982=1991: 172-3)。

キットラーのメディア史における第一ブロック「文字・文書」時代は、「手書き・文書」と「印刷・文書」のサブカテゴリーに分かれているが (Kittler 1996=1996)、後者についてはまたオングも詳細に言及している。活版印刷の登場により、ことばそのものは製造過程のなかに深く組み入れられた。こうして、ことばを商品に仕立てることにより、「ことばがモノであるという感覚」は手書きの時代よりもさらに強化された。オングはマクルーハンと同様に、活版印刷は近代社会を特徴づける個人のプライバシーの感覚、その発達に寄与したことも指摘している。印刷の普及は、小さくて持ち運びができる安価な本を大量に作り出した。これは、心理的にみれば、静かな狭く区切られた空間の片隅で一人で本を読むための、また、その結果として、まったく声をださずに本を読む＝黙読するためのお膳立てをも整えた<sup>8)</sup>のである (Ong 1982=1991: 242-266)。

メディア史観における以上のような共通性が見られる一方で、オングは「書く行為」の変遷、すなわち「手で書く」ことからタイプライターやコンピュータの「キーを打つ」ことへの変化にはそれほど関心を払っていないように見受けられ、また時代の制約もあって、彼のいうコンピュータはワープロの延長のようなものとして理解されており、「書くこと」の分析における主要な対象は「書かれたもの」、その形式・内容、表記法、それが記録される空間 (紙面・ディスプレイなど) と

なっている<sup>9)</sup>。キットラーやオングと同様に、「書くこと」を「テクノロジー」として捉えて、手書き時代からコンピュータ時代までを一貫して記述しているジェイ・デイヴィッド・ボルターの研究においても同様に、「手で書く」ことと「キーを打つ」ことの差異についてはほとんど触れられることがなく、書かれた言葉＝エクリチュールの手書きから印刷、電子テキスト時代における変容に記述の中心が置かれている。

「書かれたもの」の研究については、キットラーやオング、ボルターばかりではなく、先行するメディア論に多く蓄積されている一方で、上記のように、「書く行為」の変容、手で書くことがタイプライターやコンピュータのキー (ボード) を打つことへ変わることに注視は、キットラーにわずかに見られるのみである。眼で書かれたものを追いつながら手で文字を書くことから、初期のタイプライターにおいて書かれたものを視認できないために「純粹に書くこと」に「主体からの乖離」を見出したキットラーもまた、その後のタイプライターやワープロ、コンピュータから携帯電話やスマートフォンに至るまで、再び「書かれたものを目で追いつながら文字を書く」ことが回帰している点には言及していない。デジタル時代においては、「書かれたもの」の蓄積は「経験的人間」による処理が可能な限界をはるかに超えて、今現在も果てることなく蓄積され続けている。人間を置き去りにして自立＝自律して自走する「書き込みシステム」の理論的検討において、キットラーをはじめとするメディア論がまだ示唆に富んでいることは現在の諸事象を見れば明らかである一方で、「書くこと」「書く行為」の主体が実態としてはコンピュータであると解釈されるにしても、依然としてわれわれはコンピュータやスマートフォン、タブレット端末などを用いて何らかの文字を「書いて」いる。あるいはそのように理解している。キットラーは手書きからキーボードへの「書くこと」「書く行為」の変遷に気づいていながら、その他のメディア論もまた、紙からディスプ

レイへの記録される媒体の変化や鉛筆や毛筆やペンからコンピュータやスマートフォンへの記録する道具の変化は視野に入れながら、「書くこと」を行うわれわれの身体的行為の変化には大きな注意を払ってこなかった。「2000年の書き込みシステム」論に接近するために埋めなければならないひとつのピースとして、われわれはメディアとのインターフェイスにおける身体的な行為に対しても関心を向けなければならないだろう<sup>10)</sup>。

#### 4. 「2000年の書き込みシステム」へ—まとめと今後の課題

われわれは、なぜ今キットラーを読むのか。『ドラキュラの遺言』を先行する著作の補完としてではなく、技術の究極段階を考察する枠組みとして、先行著作と相互対照させながら読むことの重要性を前田良三は指摘している（前田 2016）。前田の議論の中から、言説の構築物としての「人間」（フーコー）と経験的人間の峻別という視点に示唆を得て、本論では、「タイプライターの継承者としてのコンピュータ」というキットラーの位置づけに従って、「書くこと」「書く行為」と書く主体—この主体は言うまでもなく書く行為を行う経験的人間（の身体的な所作）である—の変容を見てきた。以下ではまず、ここまで「書く」と一貫して記述してきた行為について、「書き込みシステム」へとデータを「書き込む」こととして捉えて、書き込むためのツールの相違に伴って変容する書き込むモードの差異について微細なニュアンスまで表現するべく、日本語とともに暫定訳の英語も併記して、「書くこと」の変遷の前景化を試みることにする。

手書き（handwriting）の文章とコンピュータのキーボードで打った（input）文章、ごく短期間ではあるがポケベルのキーを打って（beating）入力した文章、携帯電話（いわゆるガラケー）でトグル入力した（multi-tapping）文章とスマートフォンのフリック入力による（flicking）文章、

これらは同じ人が書いても（打っても）かなり違う印象を与える／覚えることは、ほかならぬわれわれ自身が日々のインターネット利用、スマートフォン利用によって察知していることである。さらに、これら文章の感覚的な相違は、かつてワープロソフトについて言われたように、入力に利用するソフトウェアによってももたらされるであろうし、さまざまなソフトウェアやアプリケーションによって出力される形式の相違によってもまた同様にもたらされるだろう。こうした書く行為の変容の現状については、本論は、キットラーのタイプライター論を援用しつつその入口を素描したに過ぎず、さらなる検討は認知科学やアフォーダンス論といった周辺領域の知見を援用して接近していくべき事象であり、今後の課題として残されている。

一方で、「書き込みシステム」概念に代表されるキットラーのメディア・システム観に依拠した把握は、デジタル化が進行する現状の把握においても多くの示唆に富んでいることを明らかにしてきた。一例をあげれば、『グラモフォンフィルムタイプライター』の掉尾近くで、カール・シュミットによるフィクション『ブリブケンの人々』（1918）のあらすじが紹介されている。デジタル時代において人間が処理できる情報量をはるかに超えて蓄積され続けるデータ、それを予言しているようなディストピア小説である。この小説は、日記をつけるブリブケン人についての物語である。架空の国ブリブケンでは、「男も女の自分の生活を一秒ごとに日記をつける義務がある」と設定されている。この日記は毎日コピーが提出され地方自治体ごとにまとめられる。まとめられた日記にはいっせいに目がおされるが、それは事項索引に沿ったやり方で進められ、カード化される。そして、「日記に対する不満はいくらでも書いてもよいが、日記を拒否することは認められない」。日記によって組織化されるブリブケン人の物語である。キットラーは、ブリブケン人にとって、「私はそれゆえ歴史のタイプライ

ターの印字である」とまとめている。プリブケン人は「精神世界と私を書きながら把握する」のであり、私は世界史の読者であるばかりではなく、その書き手でもある。世界史のどの瞬間においても、「世界の自我である者のすばやい指先のしたで…印字が歴史的物語を書き続ける」(Kittler 1986=1999: 354-67)。

情報が記録され続けるディストピア。SNSとドローンによる監視についての対談の中で、バウマンとライアンは、次世代型・自律型ドローンになると、技術者ですらその動きを制御できなくなり、あらゆるものが監視下に置かれることになること述べている。そして、すでに9・11以降、ドローンから提供される「データのツナミ」は空軍本部の消化・吸収能力を圧倒しており、今後もドローンのもたらす情報に対処する負担は増大し続けることが予想されるという。(Bauman and Lyon 2013=2013: 36-37) また、2010年に米国議会図書館は、Twitterで公開された全ツイートのログ保存を決定している。検索エンジンへの公開は行わず、許可された研究者にのみセットで提供されるという限定つきではあるが、Twitter社および議会図書館職員は、将来の歴史家にとって素晴らしいアーカイブになるだろうと述べている<sup>11)</sup>。SNSにおいても、ドローンと同様に、後世の歴史家は「データのツナミ」に圧倒されることになるだろう。にもかかわらず、「2000年の書き込みシステム」はその無尽蔵のデータベースにあらゆるフォーマットのデータを記録・蓄積＝「書き込み」続けていくだろう。

自律・自走する「2000年の書き込みシステム」にコンピュータやタブレット端末、スマートフォンといったインターフェイスを介して接続しているわれわれもまた、それら端末を用いてデータを「書き込み」続けている。しかし、その書き込む方法は、書き込むための身体的負荷を軽くする方向へと変化している。手書き (handwriting) からタイプライターのキーを打つこと (typewriting)、コンピュータのキーボードでの入力 (input)、ス

マートフォンのフリック入力 (flicking) という変遷は、「書くこと」に伴う身体的負荷を軽減してきた。そして、ここでTwitterの「リツイート」機能を想起するならば、他者のツイートを自分のツイートとしてフォロワーにむけて発信するために必要なことは、わずかに2回だけ画面をタップすること (tapping) である。「2000年のシステム」へと何かを「書き込む」ことは、こうして数回のタップへと簡略化されて、システムの自律・自走に棹差すかのように、われわれは日々データを書き込み続けている。今世紀の終焉がやってきたとき、後世の研究者たちは、「2000年の書き込みシステム」についてどのようなことを書き込むのだろうか。

#### 参考文献

- Armitage, John, 2006, "From Discourse Networks to Cultural Mathematics: An Interview with Friedrich A. Kittler", *Theory, Culture & Society* Vol. 23 (7-8), 17-38, London, Sage.
- Bauman, Zygmunt, & Lyon, David, 2013, *Liquid Surveillance: A Conversation*, Polity Press. (= 2013 伊藤茂記『私たちが、すすんで監視し、監視される、この世界について—リキッド・サーベイランスをめぐる7章』青土社.)
- Bolter, Jay David, 1991, *Writing Space: Computers, Hypertext, and the Remediation of Print*, London, Routledge. (= 1994 黒崎政男・伊古田理・下野正俊訳『ライティング・スペース—電子テキスト時代のエクリチュール』産業図書.)
- Boltz, Norbert, 1993, *Am Ende der Gutenberg-Galaxis*, München, Wilhelm Fink Verlag. (= 1999 識名章義・足立典子訳『ゲーテンベルク銀河系の終焉—新しいコミュニケーションのすがた』法政大学出版局.)
- Boltz, Norbert, 1997, *Die Sinngesellschaft*, München, Econ Verlag. (= 1998 村上淳一訳『意味に餓える社会』東京大学出版会.)
- 大黒岳彦, 2006, 『〈メディア〉の哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』NTT出版.
- Foucault, Michel, 1969, *L'Archéologie du savoir*, Paris,

- Gallimard. (= 2006 中村雄二郎訳『地の考古学 [新装版]』河出書房新社.)
- Innis, Harold A., 1951, *The Bias of Communication*, Tronto, University of Tronto. (= 1987 久保秀幹訳『メディアの文明史—コミュニケーションの傾向性とその循環』新曜社.)
- 北田暁大, 2006, 「フーコーとマクルーハンの夢を遮断する」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性』東信堂, 59-87.
- Kittler, Friedrich, 1985, *Aufschreibesysteme 1800/1900*. Fink, Munich. (English edition: *Discourse Networks 1800/1900*, with a foreword by David E. Wellbery, Stanford University Press, 1990)
- Kittler, Friedrich, 1986, *Grammophon Film Typewriter*. Berlin, Brinkmann & Bose. (=1999 石光泰夫・石光輝子訳『グラモフォン・フィルム・タイプライター』筑摩書房.)
- Kittler, Friedrich, 1993, *Draculas Vermächtnis: Technische Schriften*. Leipzig, Reclam. (= 1998 原克・大宮勘一郎・前田良三・神尾達之・副島博彦訳『ドラキュラの遺言—ソフトウェアなど存在しない』産業図書.)
- Kittler, Friedrich, 1996, "Geschichte der Kommunikationstechniken", *Semiotik / Semiotics: Ein internationales Handbuch zu den zeichentheoretischen Grundlagen von Natur und Kultur*, Walter de Gruyter. (= 1996 縄田雄二訳「コミュニケーション技術の歴史」, 『現代思想』1996 vol.24-4「特集=インターネット—メディア・コミュニティ」, 144-59, 青土社.)
- 伊藤秀一, 1999, 「メディア環境と文化—フリードリヒ・キットラーにおける文化媒質理論」『長崎大学総合環境研究』2 (1), 1-12.
- 前田良三, 2016, 「〈名著再考〉ドイツから来た〈最後の〉マイスターのために—フリードリヒ・キットラー『ドラキュラの遺言』」『思想』2016年3月号, 117-124, 岩波書店.
- Ong, Walter J., 1982, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, New York, Methuen. (= 1991 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- 寄川条路編, 大塚直・川島建太郎・仲正昌樹・縄田雄二

著, 2007, 『メディア論—現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト』御茶ノ水書房.

## 注

- 1) いわゆる「ドイツ系メディア論」の入門書として、主要な論者の議論を紹介しながら、ドイツにおいて、メディア論を中心に生じた知的状況の変動を概観した論集『メディア論—現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト』(寄川編 2007)が出版された。
- 2) マクルーハンが活躍した時代のコンピュータは「大型計算機」の域を出るものではなく、当然ながら、マクルーハンにデジタル・メディアに関する考察は存在しない。一方、キットラーの著作が邦訳されるより以前の1996年には、早くも『現代思想』誌のインターネット特集にキットラーの短い論考が邦訳されている(Kittler 1996=1996)。注iv参照。
- 3) 『書き込みシステム1800/1900』(Kittler 1985)は2017年1月現在で未邦訳のため、本文中で用いる用語については、複数の先行研究(本論で参照したものは大黒 2006, 伊藤 1999, 前田 2016)でも微妙に異なっている。本論では大黒 2006における訳語を主に用いている。
- 4) 伊藤秀一によれば、18世紀における「書き込みシステム」は、当該期の表記法=Alphabetizationにより可能になった。印刷技術と学校教育を背景に広まったこの表記法は、表記のあり方を均一化させる。表記法の統一によって、つまり同じ表記法にしたがって書くことを通して、それを実践する人々との間で何かが共有されているのではないかという想定を可能にさせていく(伊藤 1999: 3-4)。
- 5) 「口述性から筆記性への歴史的移行は、[相手との直接のやりとりとしての]相互反応行為(Interaktion)とコミュニケーションとが分化することと同等であり、これに対し文字・文書(Schrift)から技術メディアへの移行は、さらにコミュニケーションと情報とが分化することと同等である」とキットラーは述べている。さらに、「この分化の過程は、コミュニケーションメディアの歴史的記述を大きく二つのブロックに分けることを可能にする。第一のブロックは文字・文書Schriftの歴史を扱うのだが、このブロックはさら

に手書き文字・文書 Schrift のブロックと印刷文字・文書 Schrift のブロックに分かれる。技術メディアを扱う第二のブロックは、技術メディアの基礎をなす発見であった電信に始まり、アナログメディアを経て、最後はデジタルメディア、すなわちコンピューターに至る」とする (Kittler 1996=1996: 146)。

- 6) 大黒岳彦は、したがって、「Aufshreibesystem」の英訳語が「discourse network」であることは誤解を招きかねないと述べている。キットラーの「書き込みシステム」は「データの書き込み」にその本質が存するからであり (大黒 2006: 158)、英訳語からはそのニュアンスを確かに読み取れなくなっている。さらに、ドイツ語の前置詞 auf の意味を踏まえるならば、「上書きする」イメージを読み取るべきであろう。あるいは、「上書き」が元のデータを消去してしまうことを想起させるならば、データを「次々に書き加える」ニュアンスを「Aufschreibesystem」に読み取るべきある。大黒の指摘が首肯される所以である。
- 7) 本論では詳細に論じる余裕はないが、キットラーのメディア論において例外的に「経験的人間」(前田良三) について、メディアと身体の関係に繰り返し言及されている論考 (前田 2016: 122) として、ピンク・フロイドのヒット曲「Brain Damage」を論じた「耳の神様」(Kittler 1993=1998: 179-206) がある。
- 8) ここでのキットラー=オングに共通する時代区分としては、ノルベルト・ボルツによる「文字の文化」の把握があげられる。ボルツは、手写本による複写と音読の時代を「声の文化の性格を濃厚に残す聴覚優位の手書きの時代」として「第1次文字の文化」として把握し、ことばの機械的複製と黙読の時代である「視覚優位の印刷の時代」、グーテンベルク以後を「第2次文字の文化」として、「近代」の始まりと捉えている (Boltz 1997=1998, Boltz 1993=1999: 207-10)。
- 9) 「書かれたもの」の形式や内容、その表記法といった点についても、オングやボルターとキットラー—とりわけ『ドラキュラの遺言』第Ⅲ部の諸論考—は関心を共有しており、この詳細な検討については別稿を期したい。
- 10) グーグル・グラスやアップル・ウォッチに代表される「ウェアラブル・メディア」を特集したテレビ番組の中で、哲学者の黒崎政男は、マクルーハンのいう「人間の拡張」としてのメディア・テクノロジーと今後現実化されるかもしれないマイクロチップの身体への埋め込みを対立的に捉えて、現状は依然として「移行段階としてのインターフェイスの操作である」と指摘している (NHK、『クローズアップ現代』、「ウェアラブル革命 ～“着るコンピューター”が働き方を変える～」、2013年11月26日放送)。
- 11) 「エリザベス朝時代の英国を研究していて、当時の日常生活について詳しく知りたくなった場合を考えてみてほしい—何が飲食され、どんな冗談が話され、どう移動していたのかと。個人の日記や書簡などはあるものの、それらは当時のエリートのもので、部分的で内容も制限されている。…中略… (引用者注: Twitterの全ログ保存の取り組みは) ローカルな情報の宝庫になるだろう。法廷記録や公的な記録しか無いような状態よりははるかに優れている」(《WIRED NEWS》2010/4/21)。